

写真術上の発見

時事新報 1896 年 3 月 7 日

独逸のロエントゲン博士は、人体の皮膚筋肉を透して骸骨のみを写す法を発明したる由。此事の内外に知れ渡るや、学者社会の一大問題となりぬ。

今その写真術の大要を記さんに、電気の作用に由て、クルークス管より生ずる光線は、人間の視力にて見分け難き程に細微なるものにして、たゞに皮膚、筋肉、木理のみならずアルミニウム板をも透射するの力あり。而して写真の法はこの光線を生ずる機械を写し取らんとするものの前に据え、写真板を物体の後辺に置く時は、光は其物体の形を板に写し出すべし。博士は此方法を用いて箱中の貨幣と、手の該骨とを写せり。但し此発明の学理に就ては、未だ研究を尽さざる所あるを以て、博士は仮りに之を X 線と呼び特殊の名称を用うるに至らず。独帝は新聞紙上に於て此発明ありしことを聞き及び、早速博士を宮中に招き、面前に於て其試験を望みしかば、博士はガイスレル及びクルークス管を用ひて木板の後に置きたる物体と、箱の中に入れたるものとの形を写したり。此時試験を見物せし人々は独帝、皇太后、皇后其他の貴顕にして博士が発明の

由来を説明せし際には、何れも熱心に傾聴し、殊に水中に X 光線の少しも屈折せずして直線に突入するを見て、一同光力の強きに驚けり。終って帝は博士に陪食を命じたる上に、親しく王冠二等勲章を授け給ひしと云ふ。若し右の写真術にして成就せば、其功績の偉大なること弁をまたざれども、而かも之れは決してロエントゲン博士にのみ功名を帰するを得ず。ガイスレル、クルークス等の学者既に先導をなし、又ハンガリーのフィリップレナード博士も、同様の写真術に付き嘗て其試験せる所を公にせしことあればなり。(英国デーリーニュース)

* 旧字体、旧かな使いは、新字体、新かな使いにあらため、句読点を追加した。